

司式: 佃 雅之  
奏楽: 中井喜久子

前奏: 「天にまします我らの父よ」 (H. シヤイデマン)

招詞: 眠りについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。(エフェ5:14)

讃美歌 51「愛するイエスよ」

交読詩編 106:1-5

- 01 ハレルヤ。恵み深い主に感謝せよ、慈しみはとこしえに。
- 02 主の力強い御業を言葉に表し/主への賛美をことごとく告げうる者があろうか。
- 03 いかにか幸いなことか、裁きを守り/どのような時にも恵みの業を果す人は。
- 04 主よ、あなたが民を喜び迎えられるとき/わたしに御心を留めてください。御救いによってわたしに報いてください。
- 05 あなたの選ばれた民に対する恵みを見/あなたの国が喜び祝うとき共に喜び祝い/あなたの嗣業の民と共に/誇ることができるようにしてください。

朗読聖書①エゼキエル書 36:25-32

◆イスラエルの山々に向かって(一部)

- 25 わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。わたしはお前たちを、すべての汚れとすべての偶像から清める。
- 26 わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。
- 27 また、わたしの霊をお前たちの中に置き、わたしの掟に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる。
- 28 お前たちは、わたしが先祖に与えた地に住むようになる。お前たちはわたしの民となりわたしはお前たちの神となる。
- 29 わたしはお前たちを、すべての汚れから救う。わたしは穀物に呼びかけ、それを増やし、お前たちに飢えを送ることはしない。
- 30 わたしが木の実と畑の作物を豊かにするので、二度と飢饉のために、国々の間で恥をこうむることはない。
- 31 そのとき、お前たちは自分の悪い歩み、善くない行いを思い起こし、罪と忌まわしいことのゆえに、自分自身を嫌悪する。
- 32 わたしがこれを行うのは、お前たちのためではないことを知れ、と主なる神は言われる。イスラエルの家よ、恥じるがよい。自分の歩みを恥ずかしく思え。

朗読聖書②ルカによる福音書 7:18-35

◆洗礼者ヨハネとイエス

- 18 ヨハネの弟子たちが、これらすべてのことについてヨハネに知らせた。そこで、ヨハネは弟子の中から二人を呼んで、
- 19 主のもとに送り、こう言わせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」
- 20 二人はイエスのもとに来て言った。「わたしたちは洗礼者ヨハネからの使いの者ですが、『来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか』とお尋ねするようにとのことです。」
- 21 そのとき、イエスは病氣や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやし、大勢の盲人を見えるようにしておられた。
- 22 それで、二人にこうお答えになった。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、

- 耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。
- 23 わたしにつまずかない人は幸いである。」
- 24 ヨハネの使いが去ってから、イエスは群衆に向かってヨハネについて話し始められた。「あなたがたは何を見に荒野野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。
- 25 では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。華やかな衣を着て、ぜいたくに暮らす人なら宮殿にいる。
- 26 では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ、言うておく。預言者以上の者である。
- 27 『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、/あなたの前に道を準備させよう』/と書いてあるのは、この人のことだ。
- 28 言うておくが、おそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない。しかし、神の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」
- 29 民衆は皆ヨハネの教えを聞き、徴税人さえもその洗礼を受け、神の正しさを認めた。
- 30 しかし、ファリサイ派の人々や律法の専門家たちは、彼から洗礼を受けないで、自分に対する神の御心を拒んだ。
- 31 「では、今の時代の人たちは何にたとえたらよいか。彼らは何に似ているか。
- 32 広場に座って、互いに呼びかけ、こう言っている子供たちに似ている。『笛を吹いたのに、/踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、/泣いてくれなかった。』
- 33 洗礼者ヨハネが来て、パンも食わずぶどう酒も飲まずにいると、あなたがたは、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、
- 34 人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。
- 35 しかし、知恵の正しさは、それに従うすべての人によって証明される。」

## 祈 禱

天地の創造主にして全能なる生ける真の神、あなたの聖名を褒め称えま

す。主なる御神、あなたは私たちの生活の中に主の目を備えてくださり、その喜びと平安に満ちた御声によって、今日も私たちに新たな目覚めを与えてくださいました。あなたの限りない恵みを心から感謝致します。

過ぎた一週間、あなたは私たちをあらゆる良き力で充たしてくださり、愛をもって私たちを養い、導き、支え、励ましてくださいました。けれども私たちの歩みは、なんとあなたの御心から遠くあったことでしょうか。互いに愛し合うことに乏しく、言葉と行いによって人を傷つけ、自分自身のことばかりに囚われ過ぎた日々であったことを此処に告白致します。あなたが私たちの一つひとつの行いに目を留め裁かれるのであれば、私たちは誰一人、あなたの御前に立つことが出来ません。神さま、それでもあなたは、そのような私たちであることを知りつつも、この礼拝へと招き、悔い改めの機会を与えてくださいました。この礼拝の中で、祈りを献げ、御言葉を聴き、あなたを賛美することを通して、私たちを新しい者へと変えてください。イエス・キリストを主と告白し、あなたの光にあって輝ける者とさせてください。

今も生きて働かされている神さま、あなたの平和の御支配が、この地に遍く突き通されることを切に祈ります。世界は今、大きな闇に包まれ、戦争は長期化し、さらに拡大する様相を強めています。主よ、私たちの信仰を強めてください。私たち一人ひとり、今こそ信仰に固く立ち、平和を創り出す者となることができますように。あなたの平和の御支配に私たちが仕える具体的な道を示してください。

私たちの主よ、この教会の新年度の歩みを祝しお守りください。この教会で行われる全てのことがみ旨に適うものとなりますように。必要な働きに私たちが気づき、見つけ出し、そのあなたの御心を表すことが出来るようにしてください。そして私たちのその働きによって、福音の光が地上にあって輝かせることが出来ますように。

神さま、東日本大震災と、それに伴う原発事故によって苦しんでいる方々に御言葉をお語り下さい。被災地で福音を語る者を強め励ましてください。また至る所で災害が起り、人々の嘆きが聴こえます。主よ、どうか、あなたの憐れみがこの世界の隅々にまで行き渡りますよう主の力が働いてください。そのために、あなたの名による全ての教会が、キリストの福音を大きなものとする事が出来ますように励ましを与えてください。

神さま、今日この場の礼拝を共にできない兄弟姉妹のことを覚えて祈ります。様々な困難な状況の中にある友、深い悲しみの中にある友、生きる力と希望を失っている友のために祈ります。あなたが聖霊によって臨み、その一人ひとりに、その時にあって必要な慰めと励ましとを、どうか豊かに与えてください。私たちが今、心を暗くし、教会から離れてしまっている友のために何が出来るのか、あなたの僕としての働きに気づかせてください。

教会は、この月、二人の姉妹を御国へと送りました。この姉妹たちが、今、あなたの御腕に抱かれて、真の平安の中に置かれていますことを信じます。

神さま、今朝ここに備えられ、立てられた説教者を感謝致します。鮎川健一牧師が聖霊の導きを豊かに受けて、あなたの福音の消息を力強く語ることが出来ますように。あなたの御言葉が聴く私たちの心に深く届きますように、あなたの助けを祈ります。

この礼拝を通して、私たちがあなたの良き働き人としてください。これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈りいたします。アーメン。

讃美歌:492「み神をたたえる心こそは」

説教:「来るべき方」

鮎川健一

主の恵みのもとで復活節を進み、日曜日ごとに私たちは主の復活を想い起して礼拝を献げています。この恵みと幸いをさらに豊かに受けるべく、ルカ福音書から御言葉に聴きます。

バプテスマのヨハネは、二人の弟子を遣わして、「来るべき方は、あなたでしょうか。」と主イエスに対して尋ねさせました。「来るべき方」とは、旧約において預言されていた救い主、「やがて来られる」と告げられていた救い主という意味です。バプテスマのヨハネは、マタイ福音書では、この時すでに「牢につながれていた(マタ 11:1)」と記されています。そして彼は、いつ自分の命がとられてもおかしくない状況でした。その彼が主に洗礼を受けました。この出来事から人々は、「彼こそが救い主メシアではないか」と考えました。しかしヨハネ自身は、「自分は来るべき方を指し示す者」、「自分はその方の履物のヒモを解く値打ちもない者」(ルカ 3:16)と宣言していました。またヨハネ福音書(1章)では、主イエスを「神の小羊(ヨハ 1:29)」と言って、「この方こそ来るべき方」と宣言したことが記されています。人によっては、ヨハネが牢獄の中にいた時、「イエスが誰であるか?と疑問をもっていたのでは」と思う人もいます。その答えは別にしても、ここで私たちは、彼が牢獄に閉じ込められていたことを受

けとめなければなりません。普通の状態ではなかった中で、彼は既に神によって立てられた預言者でした。主イエスを「来るべき方」として指し示す役割を担っていました。彼は、イエスこそが、真の救い主であると判っていましたけれども、心に大きな動揺が走りました。

旧約の列王記上(19章)に記された出来事を思い起こします。バアルの預言者との祈りに勝って後、王妃イゼベルによって命を狙われた時の預言者エリヤのことで、あれ程の力ある預言者エリヤが、「もう自分は死んだ方がましだ(19:4)」、そう泣き言を言いました。預言者として、自分の命に危機が迫る中で心が揺れ動きます。「イエスが来るべき方である」ことを知っていたヨハネが、牢獄の中で、「いつ天の軍勢を従えてイスラエルを解放するのか、自分をこの牢獄から出してくれるのか」、ヨハネには救い主に対しての独自の想いがあったように思います。それは「力強い救い主」というものに思えます。人々を集め、神の力によってローマを圧倒するような「力強い救い主」、しかしイエスにはその気配がない。ヨハネは苛立ち半分に主のもとに二人の弟子を遣わして問います。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」と。

これまでの状況から考えてみますと、ヨハネの心境は理解できます。人は苦しい時、神仏により頼んで様々に無理難題を願いますけれども、そのような思いや願いが叶わないことがあるのも事実です。その時、「神は本当に自分を愛しておられるのだろうか」と問い、信仰が揺れることも起こります。どんな事情であれ、この信仰の揺れを経験したことのない人は一人もいないのではないのでしょうか。しかし逆境の時にこそ、信仰が成長させられる時となります。願いが叶って御の字ならば、この世の問題は、初めから何も問題として起こりませんし、究極的には、神すら存在しなくなります。必要がないとも言えます。しかし、この現実の只中に真っ向から立ち続ける時、私たちは、まことに生きて働き給う神と出会います。

洗礼を受けてから、このような人間的な想いや側面からみて、意に叶わない事態に多くの人々が出会い経験します。実際、私も高校生の時に洗礼を受けましたが、その後間もなく教会がカルト集団に攻め入れられて、様々に混乱した時期を過ごした中で、我が身を失うような体験をしました。その時に、大いに悩み苦しんだ挙句、教会からしばらく足が遠のいたことがありました。正直、誰が見ても聞いても、その時の教会の置かれた状況は尋常ではありませんでしたけれども、我が身を想えば、そのような事態に陥る根幹は、多かれ少なかれ信仰的な未熟さゆえの想いに駆られることと、教会というものを根幹から見失っているか、そもそも教会をどのように理解しているか、そのことが問われるということにありました。またよくある出来事を見ましても、教会に通っている時に起こる事態によっては、人間的な思いに適うことよりも、大半が意に反する出来事も起こり得るのです。しかしそのような事態に出くわし、自分が只中に置かれると、遅かれ早かれ教会から離れてしまい、別の教会に行っても信仰の根幹が不明瞭不確実なために、自分中心のことを繰り返してしまいます。途中で気づいたり、それこそ、神の呼びかけを受けて、たとえ別の教会であっても、キリスト教会というところに戻ることもあります。多くはそうならず、結果的に神を信ずることなく自分を信じ、二度と教会に姿を現さないか、それこそ、教会というものから縁を切る、そのような如くに除籍という事態が起こります。一連の様子は言葉での説明では難儀ですし、誤解も招くことなので、これ以上のことは避けませんが、しかし一方では、「これは神の示

されたことで自己中心ではない”と主張する者も実際は少なくありません。しかし、信仰の根幹からしますと、確かに教会で起こる出来事は、教会全体のなから降りかかるよりも、個人的な関係から歪が生じ、人間の弱さゆえに互いの関係が揺さぶられる、ということもありますから、その教会にどんな形であれ、連なる者とされたのなら、何が何でも他の教会に行ってはならないというわけではありません。状況においては、他の教会へ移るということも必要なことが起こります。しかし少なからずも、“自己本位の心持で神を思い、叶う・叶わないを自己判断しているかどうか”ということは問われるものでしょう。そうでなければ、ともすると状況によっては、いつの間にか自分の御利益を求めものになっているということにもなります。教会の立場、信仰の根幹から判断されることは机上の空論のようにも思われることもありますが、“ひとつの聖なる公同の使徒的な教会(エクレシア)”の中の信仰をしっかりと受け止める時、“すべて神の御手の中にあり、自分はその時々<sup>ごとき</sup>の出来事を受け入れ、それでもなお神を愛し、従っていくもの”ということが言われるのですが、教会というものの理解の根幹が定まっていな中では、なかなか納得のいくものではありません。またそう言ったところから、信仰生活、教会生活を続けてゆく中で次第に分かってくるのも事実です。言葉で表現しますと理屈っぽい話になりますので、なかなか分かり難いことがありますが、時間と共に深まる信仰体験は、まさに“神は生きて働き給う方であり、神との出会いによって今がある”ということを知るものです。

主はここで、ヨハネの弟子たちに答えられました。これは旧約聖書にある“神からの救いが成就する時に起きる”、と預言されていたことと重なります。主は、御自身の手掛ける出来事が“旧約預言の成就である”ことを常に具体的に示されていたのです。主は信頼が揺らいだヨハネに旧約の言葉(マ3:1)を引用して知らせました。“このわたしが既に預言されている「来たるべき者」である”と。旧約の成就、これこそがイエスが誰であるかを最も明確に直接的に示すものでした。確かに主は、ヨハネの思うような方ではありませんでしたが、言わずもがな、ヨハネの思いこそが訂正されなければならないものであり、何よりも神の言葉である聖書の言葉によって訂正されなければならないということでした。

蒸し返すようですが、ヨハネは旧約における救い主の預言が、主の到来と共にすべてが一気に解決されると考えていました。しかし神は十字架と復活、そして昇天から聖霊降臨へと続く終わりの日に至るまでの、長い歴史の中で全てを成就される道を選ばれました。主イエスと共に神の御支配、神の国は来しました。しかしそれで全てが終わったのではなく、実際、神の国の完成はまだ先になっています。“この時”を神学的には、“宣教の時代・中間の時・教会の時”と呼びます。その意味では、教会に仕えつつ神の国の完成を待たねばなりません。かといって、そのために誰か他の者を待つ必要もありません。神の国は既に始まっています。主イエスと共に神の国はあり、完成されます。完成の時、主は再び来られます。これを“再臨”と呼びます。主はヨハネにとっても私たちにととも「来たるべき方」です。

聖書に戻って見ますと、主イエスはバプテスマのヨハネがどのような者であるかを、人々に告げられました。27節です。ここで主は、最後の預言書であるマラキ書(3:1)を引用して、“ヨハネが救い主より前に来る、救い主の道を備える者である”ことを告げられました。そして、“ヨハネの後に来たわたしこそ、まことの救い主である”ということを示されたのです。続く28節の御言葉は、決して、ヨハネはモーセ、ダビデまたイザヤよりも偉いとの証明ではなく、

“ヨハネはイエス・キリストを直接指し示すことが出来た”という、この恵みの大きさを告げているのです。そこから主の救いに与る者は、更に明確に“イエスを救い主として指し示し告白することが出来る、それ故に他の者より偉大だ”とされています。主の救いに与った者は主の救いの御光を受けた、このことから受け止めることは、自分の力で今があるのではなく、主の救いの御業によって示され、与えられて今があるということです。信じる者が神の子とされるのは、ただただキリストの救いの御業によるからです。

人は、神に対して、救いに対して、自分の願いや考えを変えようとはなかなかしません。出来ないとも言える事態にまで、しつこく頑固です。そうとは別に、救いを求め、幸を願い、この世に満足求めます。聖書で象徴的に、また具体的にあるように、“ヨハネが、そして主イエスが笛を吹いても踊らない”、という姿勢にまで頑なであり、ただただ“自分の想いあって、自分の歌を歌っているだけ”です。人々は事あるごとに、“ヨハネは悪霊に取りつかれている”と言いふらし、イエスに対しては、“罪人と席を共にする大酒飲み、大食漢だ”とヤジるのです。しかし当然ながら、神は私たちの想いはるかに超えて救いの御業を成就されます。主の十字架こそ全ての人々の想いをよそに、まことの救い主たる救いの御業でした。主の誕生の出来事でさえも、人々の想いを超えたところで実現されたのですから、すべてに亘って人間の秤を超えている事は明らかです。それでも自分の想いが正しいと主張するならば、世間からも追い出されます。そういう世の人々の実情をご存じであられた主は、“わたしにつまづかない人は幸いである。”と言われたのです。

“自分の想いに固執する者は、目の前におられ、生きて働き給う神を受け入れられない”、ということを示しています。今朝、私たちに告げられているのは、まさにこのことです。私たちは生ける神を仰ぎ見る者です。決して自分の思い描いた神をイメージして礼拝するものではありません。愛する御子を十字架にかけ給うた驚くべき御業をもって救いを成就し給うた生ける神を礼拝する者です。

神の国は既に来ています。しかし未だ完成はしていません。私たちは、この“既に”と“未だ”の緊張関係の中で、“宣教の時”“教会の時”なる“中間の時”を進みます。その道すがら、神に全信頼をもって信仰生活を全うし、御国の完成と共に、神と共なる永遠の命にあって、天上の礼拝者となるにふさわしい者へと変えられるようお願い続けて参りたいと願います。

祈りを献げましょう。

慈しみ深き主イエス・キリストの父なる御神さま、真の御力をもって養い、導いてくださり、感謝致します。

復活の主に導かれて、今朝はあなたの御言葉を、ヨハネの証しを通して受け留めました。教会の業、信仰の糧、更には一人ひとりの責任ある宣教への参与を再確認でき、重ねて感謝致します。

日本においてはこの混乱の最中であって、未だ宣教の業は困難を伴います。しかし、あなたの御力に押し出されて、教会の証人として、この世に遣わされ、さらなる務めを為す希望を与えられました。

どうか教会の業に力を増し加えられ、全世界のキリスト教会に連なる一人ひとりの歩みが、御心に適ったものになりますように、支え導いてください。

一人ひとりの祈りと共に、尊き主の聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讚美歌:404「あまつましみず」

献金・感謝(増田多加子)・主の祈り

天の父なる神さま、あなたの聖名を賛美致します。一人ひとりの名を呼んで聖日の礼拝に招いてくださいましたこと、心から感謝致します。

私たちは今日、鮎川先生を通して「来るべき方」と、御言葉を戴きました。この戴いた御言葉を心に留めて、心の糧としてこの一週間を歩ませてください。

私たちには必要な物を与えられて生きることが許されています。今、夫々が与えられている物の中から、感謝と献金のしるしとして御前にお献げ致します。どうか祝して教会の御用のために用いてください。

また、主が教えてくださいました「主の祈り」を共に祈って、この一週間を始めさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讚美歌 88「心に愛を」

祝福:主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたがた一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

報告:(1)会員消息:4/21(日)、真柳信子さん逝去。真柳さんは1月の誕生日で100歳となられたところでした。葬儀は25日(木)、私の司式で千葉県佐倉市斎場で執り行われました。信子さんが今は御国にあって安らかでありますように。ご家族の上に主の慰めがありますように祈ります(佃)。(2)案内①:「月報」についてのアンケート提出最終日、協力要請。案内②:本日100周年記念祝会出席表提出最終日、教会から遠のいている方々への案内状発送のお願い。

後奏:「神もしこれらの日々を我と共にいませずば」(H.シャイデマン)